

會



報

1965年8月

242

日本山岳会

思いいづる人々

冠松次郎

山の友達というものはまことに楽しいものだ。これは山のある限り永久につづくものと思える。山旅を始めて六十余年、いまだに親しくしている山の友が幾人もいる。

私は商家の生れで、山が好きでも山の友達はなく、一人ぼっちで山に入った。むずかしい処へ入る時には土地の人を頼んで同行してもらった。しかし日本アルプスに入るようになってから少しづつ山の友達ができた。

初めて上高地へ入ったとき、徳本峠の上で穂高、明神の麗姿を眺めながら休んでいると、森林の中から話し声が聞えて、鳥々谷の方から二人の登山者が上ってきた。辻村伊助、川島録郎の両氏であった。その時には一緒に上高地から槍ヶ岳へ登った。明治四十二年のこと、その年の秋、辻村さんの紹介で日本山岳会へ入った。二三百番だった。

その翌年には中房温泉から上って、常念山脈を二ノ俣から梓川に下り、槍沢の赤沢の岩屋で油紙を張り渡して夕立のあがるのを待っていた。

小島鳥水、高頭式、高野鷹蔵の諸氏で、これから雲ノ平を経て薬師岳へ上り、有峰へ出るということである。その夜は小島さんたちの天幕を訪ねて初対面の挨拶をし、山の話を時をうつつした。

しかし今日になって見ると、辻村、川島の両氏は既に去り、小島、高頭の両先輩も自然に帰られた。最近には高野鷹蔵氏もまた不帰の客となられた。まことに残り惜しいことである。

大正三年白峰山脈へ登ったときのことだった。西山温泉から白峰山脈を歩いて、主峰北岳をめがけて登って行くと、頂の方から若い登山者が威勢よく下りてくる。頂の下の方で握手をした。小島鳥水氏の令弟の小島栄さんだった。その頃にはまだ三十才足らずの青年で、地蔵、鳳凰の方から来たのだという。長之助草やシナノキンバイなどの美しいお花畑の処で暫く話を上と下へ別れた。その後栄さんには全く会わなかった。

二、三年前に大阪へ行ったとき、関西の先輩たちが茶話会を開いてくれた。その時に「しばらくだったなあ！」声をかけた老人が、その小島栄氏であった。

あれからも五十十年になるとお互に感無量であった。栄さんも

う七十五才を越しているだろう。私が八十二才だから。老岳人相まみえて阿々大笑した訳だ。

これは昭和二年のことだった。文部省の撮影班と黒部へ入ったとき、十字峡で休んでいると、下の方から山の人をつれて悪い壁つづきをへつづける登山者が見えた。

暫くするとその人は樺小屋沢の岩の丘へ上ってきた。見るとそれは越後の大平最氏であった。よくこんな悪い処へ来られたと感心した。私の一行が黒部へ入るということを新聞で見、後を追って来られたということであった。

やや暫くの間剣沢の落口を中心にした溪の景色を見て、大平さんはまた来た方へ降って行かれた。日本山岳会の名誉会員で、もう随分な年であったと思ったが、道のなかつた黒部の廊下をよく上って来られたものだと思ふ。感心した。

次は昭和七年の八月のことである。減水期をねらって黒龍川の北又谷を溯って黒岩平へ上り、長梅山、朝日岳、雪倉岳と歩いて鉢ヶ岳の草の斜面で休んでいると、年配の登山者が二人、白馬岳の方へ歩いていったのが、私たちの姿を見ると戻って来た。

「蓮華温泉へ行くのにはどこを降ればよいか」と聞く。

それで雪倉鉢山のシキへ下る道を話した。

「冠君じゃないか」と云われて

顔を上げて見ると、それは武田久吉博士だった。連れの人は、後にアフリカ大陸で客死された田辺和雄さんであった。

目次

思いいづる人々(冠松次郎1)
故梅沢観光君遺児教育資金始末記(鳥山梯成2)
木暮祭に想う(望月雅郎2)
佐渡三題(藤島玄3)
中河与一・佐藤一榮4)
Hindu Kush 会議(谷泰5)
Shah Fladi and Mir Samir (四方田靖・松倉和義6)
最近の中部 Hindu Kush 情報(吉沢一郎7)

【会員通信】十勝岳裏通り(森谷虎彦8)
御挨拶・北大(渡辺千尚8)
Jhoote Star (吉川尚郎10)
奥高野へ(仲西政一郎10)
蔵王の山開き・安達太良山(村井米子11)
パミールの雪(福田宏年11)
サルカンタイ(江上康12)
ローガン隊(川上隆12)
マッキンレー(浅野清彦12)
逸存精舎(田中栄9)
第一回海外登山懇談会(13)
【図書紹介】心に山ありて(島田巽13)
雪原の足あと(松方三郎13)
会務報告14)
新入会員・ペルー通関15)。

処もあるうに白馬岳で、しかも山草の美しい鉢ヶ岳のお花園で、武田先生に出合うとは珍らしいこともあるものかなと、私はうれしくなった。

故梅沢親光君遺児 教育資金始末記

鳥山 梯 成

本会発起人の一人であった梅沢親光君（1886～1976）が亡くなったのは大正十五年一月一日、告別式は神道で行われ青山墓地に葬られたのは今から約四十年近くになります。梅沢さんの同僚陸軍砲工学校の教官の方々と本会の有志によって遺児靖子さん（当年満七才）のために教育資金を募りまして其後その保管を筆者に託されましたが此年月の間に戦争という大事件があつてこの教育資金の始末について有志の方々に御報告することが出来ませんでした。

さて毎年一度づつ集る六義園の有志懇談会でいつも田部さん、近藤さんから、ところで梅沢のお子さんはどうしていられるだろうとお訊ねを受けていましたが、去年の暮まで判然とした御消息が知らなかったのです。ところが図らずも同君の妹君澄江さんから御手紙を受取り、尚、今春には靖子さんから委しい御消息があつたのでそれを次に記して見ることにします。

（前略）昭和十九年に親汎叔父（梅沢親光君実弟）とお宅へお訪ねいたしました折申し上げました通り、六月二十七日岩手県二戸郡浄法寺町の山口呉服店の次弟山口三郎と結婚いたしました。二十年三月十日に空襲の為東京本所の家を焼かれ、主人の実家である浄法寺町に参りました。そして二十六年四月一日現在の所に白鷗高校の神代学園管理者として参り、早くも十四年になります。母でる子はその間私共といつも一緒にございす。四年前に澄江叔母にも来て頂いて唯今は娘二人と一緒に六人家族でございます。長女は和子と申し二十二年九月二十三日生れ、昨年叔母の勤めております調布高校卒業後朝日生命の新宿にありますが本社で、キーバンチャーをいたしております。次女は中学三年で、こんど又調布高校へ入学いたしました。おかげ様で皆身体だけは丈夫でございます。

私は満で四十六才、主人三郎は五十三才、和子十五才、母でる子は満六十九才になります。主人は園芸に力を入れており、学園の広い庭を自由に使わせて貰って自然に親んでおります。（下略）

梅沢親光さんが亡くなって約四十年、当年満七才であつた靖子さんがもう四十六才になられ、二人のお子持となられた事、全く月日の経つのに驚かれます。遺児教育資金保管者として事明細に数字をならべ御報告するのが常道ですが当時の書類はお金と一緒に筆者の疎開先鶴沼の宅で靖子さんにお渡しいたしましたその結婚資金の一部としてお役に立ち、何から何迄目出

度し目出度しの結末を得ました事を四十年前に資金を御抛出になつた方々にお知らせいたし改めて故人におよせ下さつた御厚志に感謝いたしたいと存じここに筆をとつた次第です。

木暮祭に想う

望月 雅郎

岳聖木暮理太郎翁の偉業を後世に伝えんとする翁を慕う人達によって作られた胸像が、金峰山麓金山の自然石に収められ設立されてから早や十五年。

昭和三十四年の七号台風によってその附近が甚だしく荒廃したため、木暮碑委員会を設けて移築の計画をたてて、広く岳人の浄財と地元の協力を仰いで、

現在金山有井館の上方五十米で、金峰山の最も眺めの良い地点に再建された。これを記念して第一回の木暮祭が昭和三十



碑前祭（昭和38年5月写）

（山梨支部）

七年秋、落成式を兼ねて盛大に行われた。又、地元の人達の協力を得て紅葉祭も合わせ行われて以来、毎年の秋の行事となったわけであるが、単なる観光行事となつてはと言ふ一部の批判をききながらも、地元の協力に依る意味もあり且つ広く翁の偉業を伝えんとして幅広い行事の中であつた。木暮祭の発展をと考えている。

一方翁の命日が五月六日であるところから、木暮祭とは別に欠かさず、毎年五月に翁を偲んで集つて霧の旅、石楠花山岳会等の入道がある。山梨支部ではこの先輩方と共に先覚者の偉業を偲び、心の糧を得たいと、毎年五月第三

◆最後に私のことを少し……これは昭和十年頃の話である。日本山岳会の役員会で高頭さんにあつたら、だしぬけに「冠君！君死んだというではないか」といわれて驚いた。一体どうした訳かとときくと、

「ついこの間、日光の奥白根山の上で、平沼亮三君に会つた。その時に、「冠さんは死にましたねお気の毒にと、平沼君が云われた」という話である。

これは同姓の親類の者が死んだのを間違えて伝えられたのである。この外一度と、私は二度ばかり死んだことになっている。死にそこなつたそのおかげで、今年八十二才でまだどうやら無事に過している。まことにありがたいことだ。

◆ 本稿は昨年十二月頃執筆になられたもののように思われるが、都合により掲載が今日になってしまった。お許し頂きたい。尚、本年六月十一日の「日本経済新聞」の紙面に、本稿と同じ趣旨のご感想が出ていますので、有志の方はそれをお読みになるようお奨めする。

冠さんは、われわれには数少ない大先輩の一人、いつまでも健康に在であられるよう祈つてやまな

（編者）

三 渡 佐

佐渡の山々

藤島 玄



「鄙びた佐渡を探ねる会」から一週間後に佐渡の山を歩いてみた。水母と雀を迎えられ、両津港から車でドンデン山の国民宿舎大佐渡ロッジに入る。青粘峠からドンデン池の幕営施設と、石楠花の保護地なるものを視察した。登山道の真中に保護と称して借地境界線の石楠花を伐採し、迂回路を作り、コンクリート角柱に有刺鉄線を巻くという馬鹿げた破壊が、若干の権力を振り廻す知識階級なる奴等の神経であり良心であった。

ロッジの夜景は素晴らしい。両津港に二〇〇余りのイカ釣の漁火が集って、天の星座と連なるのは飽かぬ眺めである。

七月二十八日 青粘峠で横断車道と分れ、金北山縦走路に入る。峠に海浜植物のハマナスの群生がある。真紅の花を混えて濃紅采形が多い。この七・二mの越路は入

川から両津市へ、外海府の賑女達が海産物を運搬した道だ。紅い実が荷の底にでもついてきたのか、遠い想いでその花をみつめた。

確かに掘っていた縦走路が、昔の炭焼屋や放牧の牛馬の蹄跡にまぎれて、両腕でユズリハとハナヒリの藪を押すようになっている。

笠峰（九三七・五m）の三角点は、芝生の真中に十文字を画いた四角の紙をおいたように埋れている。この先の平城畑（六五三・六m）もそうだが、石標の頭が芝生と水平であるなど、こいつは深田久弥先生に撫でてもらいたい。

頂上から縦走路は明瞭となる。石花越の交叉点まで僅かの距離だが、磨いたような艶麗な芝生続きで、人工を極めた庭園でもこれほどの美しさは得られまい。薄霧を透して陽が走ると、艶かな葉をひしめかして、白花をちりばめるハクサンヤリナゲの群生と、燃えたつ朱紅色をこぼれるように咲かすレンゲツツジの群落が、巨大な植木鉢を配置したように交互に現われる。そして、ヨウラクツツジの桃色と、サワフタギのたわわの白花が咲き、ゴゼンタチバナはバツジのように咲いていたが、イブキジャコウソウの花は早かった。

石花越から主稜を離れて、青っぱいザレ（崩壊地）を、石花川の源流の小沢沿いに下る。道が掘みになると、そこには外海府の海岸まで続く緩斜面が眼一杯に展開し

ている。標高八〇〇m、約六〇〇mまでの約四kmの間の総てが、内地離れした青い絨毯の起伏である。赤と白と濃淡の緑の豪華な花模様を織りなして、光る池と、黒い針葉独立樹がアクセントをつけ放牧の牛馬の群れが静けさに対する動きのコントラストをなして、こ

スポーツ外貨

登山計画書の提出について

当会所属の諸団体のうち昭和四十一年四月から同四十二年三月末の間に、スポーツ外貨の割当てをうけて、海外登山を行う計画を持っているところは、来る八月二十五日までに登山計画書などを当会までご提出下さい。同日の消印のものは有効ですが、期日に遅れたものは一切受理いたしませんから御注意下さい。

お問合せは海外登山係
大塚博美（403）三一一一へ

の風景を音楽的なまでにおしあげるとともに、がらりと変る秋の色彩さえも想わせるのであった。この輝くような高原の基調をなす芝生は、ニッポンシバで、比較的乾燥した卓越風の通路一帯にあるようで、丁寧に刈込まれたように平らに滑らかに揃っている。ど

こに腰を下しても寝ころんでも湿ってこない。よくみると花茎を立てて淡黄色の花穂を立てていて、それに相応しい小虫がピョンピョンはねていた。佐渡では山の芝生をシラバと云って、何処の山にもあるものと思っている。ところが内地の山の草原は湿っていて管類が大部分である。シラバは花生場の路だというのが、米山の各登山口にある屍羅場と同じ意味から転化したのかどうか。屍羅場はこれ以上は結界で、女人禁制の境界地点を指しているのである。

エゾヤマオダマキが紫花を傾け黄花のミヤコグサとキンポウゲの花群の中には仔牛連れの牛が寝そべっている。湿地と池畔の大きな葉はヤグルマソウとザゼンソウ、白い綿のように枝に下っているのはモリアオカエルの卵だ。鶯はあちこちに蟬のように鳴いてサワフタギやタニウツギの紅白の花の中をくぐってゆく。

こんなに明るく広く美しい処に牧舎でもあったら、それこそ童話のお姫様でも出てきそうだ。

石花越のザレまで見えてきたが金北山はまだ白い霧の彼方だ。石花川源流地帯はまだ深さを見せぬが、尾根張りには堂々たるものだ。美しさの変化を追って、S字状に迂廻して歩くと、斜面がいつの間にか絞られて広い尾根状になって、川内用水が嬉し気に走っている。播種らしいクローバーの白花

とキンポウゲの花の中に、黒牛の群れがどっかと前足を折って、ものういように動かない。

ヒシの葉を浮かせたキリバノ池から平城畑の三角点にたつと、金魚鉢の水のように静かな日本海を弓状にくぎって白い藻浦崎、箱庭式の岩礁に対して煙一筋たない漁村、その上の段丘の青田を一直線に切る白い車道、それに続く山麓の万緑中に白い点在はマタタビの葉であった。

散歩道のように尾根に芝生が続いたが段々と木立ちが深くなる。本州の南限のヒノキアスナロ（ヒバ）が天然杉と混生し、ナナカマドとシバグリ、キイチゴもどきざりあった。鶯に代って蟬が鳴くともう赤松林で、車道は砂浜のハマナスの群れへ導いて行った。ワカメを干していた老夫婦が「腹がすいたろう」とメカブをくれた。

翌日は、北片辺の親切な旅館松屋を出て、栄治さんの案内で金北山へ登り返した。車道の終点の舟山池（約六〇〇m）の上下の造林杉と天然物の広大さに驚き、大場山から西の戸中山（八三〇・四m）へかけての大芝生と、戸地川を隔てた金北山、二ノ岳、妙見山、大華山の大きさにも眼をみはるばかりであった。小灌木の茂りを分ける掘道を抜けて、金北山と二ノ岳の鞍部へ出て、国民宿舎白雲荘からバスで下山、五時の汽船で夕暮れの新潟へ帰った。（完）

佐渡の印象

中 河 与 一

新潟県支部主催の佐渡行は近來になく充実したものであった。

上陸すると地元の婦人達が佐渡

おけさの恰好で吾々一行を出迎えてくれ、その役人が歓迎の辞を

のべてくれた。それに対して楨さんが篤実な挨拶をのべられた。如何にも佐渡らしい演出であった。

それから吾々はバスに乗って先づ真野の御陵に参拝し、ついで羽

茂一の宮に参拝した。そこでは珍奇な御神楽とか郷土芸能を見

せてくれた。そのまま小木を過ぎて佐渡の南端宿根木に着いた。

夕方四時半頃ではなかったかと思ふ。

段丘の下の部屋でその男達は多く出稼ぎに出て、家を守っているのは主婦ばかりであるという。

海岸であるのに山中にあるような想いを起させた。

ここは岩富武二氏の「佐渡」という写真帖に多くの材料を提供しているところで、秘境とはゆかぬ

までも如何にも俗塵を払った処であった。吾々はその海徳山称光寺にとめてもらった。翌日は速華

峰寺を訪れ、そのまま金北山（一七三）の国民宿舎のあるところまでバスで登った。山蔭にはところどころ雪が残り、ナナカマド、

山ツツジ、ミヤマアオイ、オダマ

キ、イワカガミ、マタタビ等の花が満開であった。

山の頂上には自衛隊の丸いドームをもったレーダー基地があり、

遠く海を越えてシベリアに対していた。刻々に彼地の情況が捕えられていくという。

その辺には雪の深い頃の道しるべの長い竹竿が立ったまま残っていた。ドンデン山の宿舎を越えて

両津の港が見渡せる。妙見キャンプ場、地獄谷、長坂峠などを越えて元の金山の町相川

に出た。奇勝尖閣湾に寄ることも忘れなかった。更らに二時間、外海府に出

て、その関という部落で文弥人形をみせてもらった。

岩谷口の辺からは道がなくなつたので三分の二の人々は船で、楨

さんなど十数人の人は笠取峠を越えて一時間半、真更川に着いた。

そこは佐渡の北端の村で海に面したところであったが、人は海から

高い地点に住んでいた。農業や林業を主にしているという。日本

一の若布のとれるところで、その夜の食膳には若布の油いためや芽

汁が出た。

翌日の朝は雨もよいであったが船で願部落、弾崎灯台、鷲崎、北

小浦などを右に見ながら三時すぎ両津に着いた。

×

×

×

×

×

佐渡を一部びた探ねる会

佐藤 一栄

史蹟と歌の島といわれ、なにが遙かに幻想的

ムードに包まれていた佐渡も、最近には押寄せる観

光客で、船も車も宿も連日超満員といった繁昌振

りだが、しかし、観光路線を離れば、まだまだ純朴で、

しかも厳しさを秘めた島人の生活があり、澄んだ潮風に揺る風物

にも、昔ながらの自然のたたずまいが感じられる。

昨秋、文化祭記念行事として催した、当支部の佐渡回遊が好評を

得たので、今年は石楠花の季節を選び、六月十八日から二十日ま

で、支部総会を兼ねて、観光佐渡の裏道を探ねた。

楨有恒先生を初め深田、村井、松本、中河の諸先生、それに石川

支部の亀田さんの御参加を頂いて総勢五十余名となり、楽しく、意

義深い集会となったが、地元の佐渡山岳会並びに観光協会、関係市

町村の多大な協力、後援には感謝のほかない。

第一日、両津市からバスで妙宣寺、国分寺を廻り、新町では名物の白魚そばを賞味、そして真野

宮、度津神社と観光コースを辿ったが、神社での「つぶろさし」と

称する妹背神楽は圧巻だった。神社に隣接の植物園を見学ののち、

小木町を経て宿根木に下車する。

江戸時代には島の要港として賑わったといわれる宿根木も、今は佐しい漁村となり、玄武岩の岩礁にたわむれる、ひそやかな波のささやきと、この地特有の「たらい舟」の風情が心に残った。遠来のお客様は称光寺にお世話願ひ、私等は部落の公会堂を借りたが、支

第二日 朝早く部落の裏山へ、藤原期のもといわれる磨崖仏と八十八体の石仏を觀にゆく。大樺に覆われた冷々とした洞窟の暗がりに蠟燭をかかげながら、信仰を大きな支えとして生きた往時の漁民の、宿命的な悲しさを考えさせられた。

移転に伴って現在のラウルビンジへ移し、カラチには新しく総領事館をつくる。

一、ソ連との領事条約交渉がまとまれば、ナホトカ、オデッサの二カ所に領事館を置く——というものである。

またこのほか日韓国交正常化の諸条約、協定が発効すれば年内にもただちにソウルの在外事務所を駐韓大使館に昇格させる

が、これとともに釜山に総領事館を設けることに内定済みである。

なお明年度ネパール大使館が設けられれば、わが国はアジア地域の国交関係をもつすべての国に大使館を完備することになる。

（東京新聞・四〇・七・四）

初夏の浜辺は潮騒さえなく、手を振って送ってくれる人々に礼をのべてバスに乗る。小比叡の蓮華峰寺、佐渡博物館のロックガーデンを觀て、金井町から妙見山の白雲荘に登る。海拔八百米の妙見キャンプ場は、白石石楠花にはまだ早かったが、青い芝生に真紅の蓮

夜更けるのを忘れた。

部総会のあとは婦人会給出の歓待を受け、バラの花に飾られたテールに、次々と出る手作りの御馳走の山には、一同も眼をみはるばかりだった。日暮れては螢狩りに童心を呼びもどし、食用蛙のトボケた鳴声の中で青い灯を追って、

夜更けるのを忘れた。

部総会のあとは婦人会給出の歓待を受け、バラの花に飾られたテールに、次々と出る手作りの御馳走の山には、一同も眼をみはるばかりだった。日暮れては螢狩りに童心を呼びもどし、食用蛙のトボケた鳴声の中で青い灯を追って、

夜更けるのを忘れた。

部総会のあとは婦人会給出の歓待を受け、バラの花に飾られたテールに、次々と出る手作りの御馳走の山には、一同も眼をみはるばかりだった。日暮れては螢狩りに童心を呼びもどし、食用蛙のトボケた鳴声の中で青い灯を追って、

夜更けるのを忘れた。

部総会のあとは婦人会給出の歓待を受け、バラの花に飾られたテールに、次々と出る手作りの御馳走の山には、一同も眼をみはるばかりだった。日暮れては螢狩りに童心を呼びもどし、食用蛙のトボケた鳴声の中で青い灯を追って、

夜更けるのを忘れた。

部総会のあとは婦人会給出の歓待を受け、バラの花に飾られたテールに、次々と出る手作りの御馳走の山には、一同も眼をみはるばかりだった。日暮れては螢狩りに童心を呼びもどし、食用蛙のトボケた鳴声の中で青い灯を追って、

夜更けるのを忘れた。

部総会のあとは婦人会給出の歓待を受け、バラの花に飾られたテールに、次々と出る手作りの御馳走の山には、一同も眼をみはるばかりだった。日暮れては螢狩りに童心を呼びもどし、食用蛙のトボケた鳴声の中で青い灯を追って、

夜更けるのを忘れた。

部総会のあとは婦人会給出の歓待を受け、バラの花に飾られたテールに、次々と出る手作りの御馳走の山には、一同も眼をみはるばかりだった。日暮れては螢狩りに童心を呼びもどし、食用蛙のトボケた鳴声の中で青い灯を追って、

夜更けるのを忘れた。

部総会のあとは婦人会給出の歓待を受け、バラの花に飾られたテールに、次々と出る手作りの御馳走の山には、一同も眼をみはるばかりだった。日暮れては螢狩りに童心を呼びもどし、食用蛙のトボケた鳴声の中で青い灯を追って、

夜更けるのを忘れた。

部総会のあとは婦人会給出の歓待を受け、バラの花に飾られたテールに、次々と出る手作りの御馳走の山には、一同も眼をみはるばかりだった。日暮れては螢狩りに童心を呼びもどし、食用蛙のトボケた鳴声の中で青い灯を追って、

夜更けるのを忘れた。

部総会のあとは婦人会給出の歓待を受け、バラの花に飾られたテールに、次々と出る手作りの御馳走の山には、一同も眼をみはるばかりだった。日暮れては螢狩りに童心を呼びもどし、食用蛙のトボケた鳴声の中で青い灯を追って、

夜更けるのを忘れた。

華ツツジが燃え立ち、両津湾、真野湾、そして小佐渡の山波を一望に納める大観は絶讃に価する。先生方は車で金北山頂を往復する。大佐渡スカイラインを、ガイド嬢の説明も上の空で、カメラを覗きながら降り、佐渡金山と博物館を見学し、相川町の「ホテル大佐渡」では浪立会の郷土芸能を鑑賞した。更に光園湾で遊び、定期バスの終点、岩谷口で無形文化財の「文弥人形」を鑑賞する。哀調を帯びた語りと、太棹の音に乗って揺らめく人形が、江戸末期の庶民的な中にも妖しいムードを繰広げて観衆は身じろぎもしない。

岩谷口で隊を分け、荷物と共に船で行く人と、徒歩で笠取峠を越える組となる。大ザラ川を渉り、峠を越えて真更川までは二時間足らずの道のりだったが、庭園のそぞろ歩きにも似て楽しく、海と山の景勝が見事に調和して私等を魅了した。渚では翡翠や赤玉石を拾い、山道では枝もたわわの木苺に舌つづみを打った。

真更川は海岸段丘にある半農半漁の寒村で、船着場への八十米もある断崖の登降は、この土地の生活の不便さを端的に物語っているように思われた。ここでも民宿の予定だったが、部落はわかめ採りの最盛期のために旅館泊りとなった。食卓には海の幸が並び、二晩目のことで話が弾んだ。時代がかった瀬戸の大盆には、その昔これ

を手にした旅びととの感傷や、大漁に酔って「おけさ節」を唄った漁民の、赤銅色の指先の温もりが残っているようで、ひとしお旅情を誘われた。

第三日 小雨に濡れた断崖の小径を海岸に降り、島の秘境といわれる外海府の絶景を、機船松前丸の甲板から眺めた、大野亀、二ツ亀の絶壁に海鵜が羽ばたいていた。冬期間は卓越風をまともに受けて、荒涼としたダークグレーの世界となり、厳しい波浪と斗って凄絶な様相を呈する。玄武岩や石英閃緑岩の断崖、岩塔の連りも、今は小雨にけむり、和やかな緑を冠り、海は澄明なコバルトブルーに風いていた。

島の最北端、弾崎の白い灯台を廻り、鷺崎港で昼食をとる。ここでも地元の手厚いもてなしに恐縮したが、お膳に出された握り箸ほどもある似貝は、にたり貝とも称するそうで、その珍奇な形態と色彩には、流石の山男、山女も度胆を抜かれた恰好だった。

鷺崎を五色のテープで見送られて、内海府の景勝を三時間走り、途中で鯛網漁を見物して、振出しの両津港へ戻った。

両津では、旅の最後を飾る「鬼太鼓」を鑑賞する。二匹の鬼が太鼓を打って舞う勇壮なものだが、前日の素朴、枯淡な文弥人形と較べて、非常に対照的な印象を受けた。

このたびは、気のおけない安直な遊覧旅行だったために、不行届きの点も多く、かなり欲張った計画で、地元にも御迷惑をかけた。粗野な越後の山男と、行動食を共にして頂いた本部や県外のお客様には、お礼を申上げるとともに、御寛容をお願いしたい。しかしこうした機会を持つことができて、中央の情勢を知り、地方支部の在り方などについても啓発される点が多かった。いろいろと教えを受けて、支部会員は何よりの収穫であったと喜んでいる。

HINDUKUSH TAGUNG '64

ヒンヅークシュ
会議に出席して

谷 泰

フロレンスに滞在していた私は、ザルツブルグのA・ディーンベルガーから手紙をももらった。十二月四・五日（昨年）にヒンヅークシュ会議を開くから出席してほしい。またノシャックやスワート隊の隊長にも招待状を出したい、というのである。酒戸さんや松下さんのご出席はむりだ。ヒンヅークシュには行ってないが、私として満更因縁がない訳ではない。それにワハン谷の登山では先駆者のな日本だ。誰も出席しない手もなからうと思って出席することにした。

十二月四日、大雪で汽車が延着、ザルツブルグには十時すぎについた。市の会議場にはすでに五・六十人の人々が集っていた。出席者のテーブルには各国の小旗が立ててあって、国際色豊かである。独逸はもちろん、英、仏、伊、ノルウェー、スイス、ポーランド、ユーゴスラビアからの代表者。それに六十二年サルトロ・カンリ遠征のとき一緒だったバキスタン・カラコラム・クラブの副会長、ハイヤットまで来ているではないか。わざわざ招待したらしい。その登山外からは唯一人の出席であいさつを求められた。

ヒンヅークシュ会議は六十三年ミュンヘンで一度ひらかれた。ところがその後小遠征隊が続々同地域に入って、多くの初登頂がなされた。主にそのうち、ミュンヘン山岳会の中核ヒンヅークシュ隊と、グラツ、ザルツブルグのワハン遠征隊の報告が一日の主なプログラム。二日目は学術調査報告でデイスカッションということになっていった。ところが当日になると、ポーランドのワハン隊（六十年、六十二年）のメムバーが、喋り好きのシュクスチンスキーを団長にのり入れる。イタリアのサラグラール隊長F・マリニ、そして登頂者ビネリがフィルムを持って現われる。会の内容は一挙に膨脹してしまつて、予定の言語研究、気

象研究の報告はひっこめざるをえなくなった。これらの登山隊の活動は、吉沢一郎氏の報告に詳説されるところで省きたい。ただドイツ・オーストリアまたポーランドなどの隊が自国から夏期休暇を利用して、小型トラックで往復していること、また低いが多数座の初登頂、縦走をして、学術調査もインテンシヴにやっていることが特徴的だった。

二日目の午後は、一般市民の理解を深めるため、M・シムムックと、A・ディーンベルガーの講演、カラコラムの大パノラマ写真の展示説明があった。夕方懇親会のこととは、ザルツブルグの若い女子山岳会員のサーヴィスで、遠方からの賓客たちは、チロル・ダンスを踊った。

六日、主催者の中心、ディーンベルガー一家にあいさつをして雪だけのザルツブルグをあとにした。車で南へ、イタリア国境へ向いながら、たった一つだけれどもアフガン側の最高峰ノシャックを、日本人が登っておいでよかったなと思った。

Hindu Kush

ヒンヅークシュの意味についてはいろいろの説があったが、現在ではヒンヅ（インド）、クシユ（ソ連領内のコーカサス山脈）で、インドにあるコーカサスというところに着いていく。

西部及び中部ヒンズー・クシュの偵察

SHAH FLADI と MIR SAMIR

東北学院大学山岳部OB

四方田 靖・松倉 和義

前略ご免下さい。御無沙汰申上げております。ヌーリススタン山群、パンシールの旅を最後にカプールにやってまいりました。残務を整理しまして、六月初旬帰国の予定しております。

コー・イ・ババ山群、シャー・フラディ峰附近及びヌーリススタン

(パンシール側)、ミール・サミール峰附近を主にした山群に入域いたしました。

ワハン谷はやはり入域許可がとれず、残念でしたが、シルク・

ロード宿場町コンドスまで見物に行ってきた。ソ

連の技術援助を得て、出来た道をソーラ

ン峠(トンネル)を経て北方には、時間的には非常に楽に行ける様子です。

コー・イ・ババ山群、シャー・フラディ峰附近及びヌーリススタン(パンシール・ダリオ、ミール・サミール附近のことは、附図(小生作図)でご説明申し上げます。カプールよりジープで約10時間

でバーミアン

(カール・サリカール)ここで地方警察に登録し、リエゾン・

オフィサー(警官)一名をつけてもらいました。

カール・サリカールのバザールで食糧その他購入、荷(第一

回約100kg)を二頭のロバにつけ、ハジガック・コータルとシャー・

フラディの中間の沢に入り調査。次に約150kgの荷で、シャー・

フラディ最奥の部落、カマティに向(約二日行程)。

カマティの部落はそれにBCを作り調査、季節的に低地歩行は楽

でしたが、沢にはまだびっしり雪があり夜間行動。シャー・フラディ峰対岸の約四、

五〇〇m峰に登りコー

ス研究、峠までアタック・キャンプを持ち上げました。五月中旬よ

りは雨(雪)が一滴も降らないらしいのですが、まだ雨季の名残りで

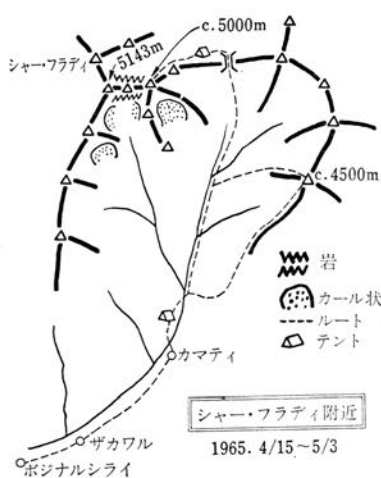
もあるらしく天気が勝れず、又器具の不足などで、シャー・フラ

ディを目前にしながら、涙を吞んで引返し

ました。五、〇〇〇m峰から頂上までは夏期なら問題なく行けます

が、今は雪庇と雪崩が心配で、少ない道具ではどうしようもありません。そこで当初の目的である調

査に重点を置き、登頂の方は断念いたしました。次にヌーリススタン山群(パンシール・ダリオ側)には最初パンシール入口の街、グルバハールまでの許可しか取っていなかったの



で、内務省に直接交渉(カプール)してパンシール全域の入域許可をもらい、基地のコージョンに向い

ました(附図参照)。ホイレワートまで車で行けるはずが、途中の街ルハで地方警察への手続を

したり、これも下調べが不十分でしたが、車でドンド

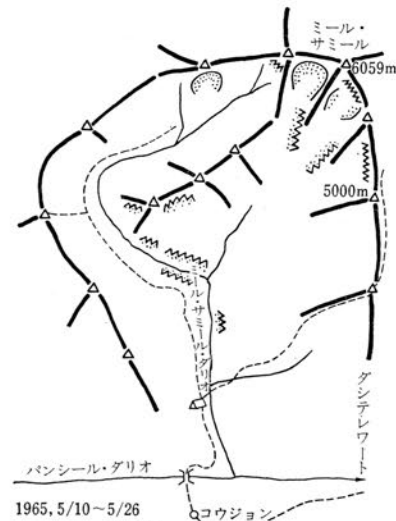
ン奥地へ入りました。ゼネの部落で一泊、こ

でも連絡官一名をつけて貰いカライパリオンの部落まで馬三頭を連れていきまし

た。コー・イ・ババ山群の旅でもそうでしたが、部落毎に警察の連絡

も連絡官一名をつけて貰いカライパリオンの部落まで馬三頭を連れていきまし

た。コー・イ・ババ山群の旅でもそうでしたが、部落毎に警察の連絡



場所(?)の如きものがあり、普通の民家と変りなく、めしや寝泊りその他の面倒をみてくれます。手掴みでナン(薄く焼いたパン)やバラオ(米の脂揚げ)その他を食べさせてくれます。

ここでも雪が多く、ミール・サミール・ダリオを峠まで行けず、対岸の山々に登ったに過ぎませんでした。本隊遠征の可能性はますます深まりました。東西(?)

ヒンズー・クシュの山々でしたら、ツーリストの資格で十分二、三の山々に登れるでしょう。

ネパールの事情もあり、今後益々ヒンズー・クシュに来る登山者が多くなるのではないでしようか。

(深田久弥氏宛)

ミール・サミールへのアプローチ



最近の中部ヒンズ

I・クシュ情報

◇

中部H・K特にK・M山群において科学的な調査を最初に行ったのは、米国の地質学者E.F. Foxで、彼は一九三七年にアンジェマン部からワルサーシ峠を越えてファルカール谷へ入った。一付図参照。

次に現われたのが一九五五年のケンブリッジ大学隊。彼等はK・M山群中のHezari-Muhammad (c. 4500m) — この山の位置不明 — に登った。これはこの山群における最初の登山と考えられている。同じ年と思われるが、ドイツの地質学者C. HeinzとH. Filippieの二人がK・M山群にある諸渓谷を踏査した。然しこれら二つについての委しい資料は今手許にない。

この山群が徹底的に調査され、登られたのは遂一、二年前のこと、二隊によってであるが、両方ともドイツ山岳会のミュンヘン支部から派遣されたものである。

1963年隊

隊長 Dr. Axel von Hillebrandt
隊員 J. Edrich, E. Grätzbach,
H. Huber, R. Köfferlein,
E. Rubel

活動期間 7月～9月

初登頂 5,680 m, 5,680 m, 5,650 m, 5,620 m 標高 42 峰
公式報告書 "Münchner Hindu-kusch-Kundfahrt, 1963", München, 1963

1964年隊

隊長 Wolfgang Haase
隊員 E. Haase, E. Rinkl, W. Strass

活動期間 7月～8月

初登頂 5,620 m, 5,580 m, 5,560 m, 5,530 m 標高 17 峰

殺害事件の発生

H・Kについてはいろいろ種やかでない噂 (例えば女子登山隊の全員行方不明など) を耳にしているが、一九六四年には噂でなく実際の事件が報告された。即ち別記の「ミュンヘン隊の隊長が「セブ・アブ谷の悲劇」と題した手記を発表しているの、それをここに紹介し、これから行こうとしている人達の参考に供したい。

(吉沢)

◇

ラクイやウシヌガン谷の踏査を終ってから、前者の北西隅にある二つの峰が、最後の登山対象としてE・ハーゼ、リンクル並びにシュトラースの三人を惹きつけた。隊長は近くの村を訪れるためにBCに残った。

ここにはイスカゼールからウシヌガンの牧地へ行く道が通っているが、毎日通っていたアフガン

人の中の二人が、登山家達の前に腰をおろして、次の日ならいつでも荷担ぎをやるかと申してきた。その中の一人が武器を持っていたことは知っていたが、これは別に珍らしいことではない。

八月十二日の朝、登山家と担夫達はセ・アブ谷 (これはシ・アブ谷ともいい、前者は三水の意、後者は黒水の意) へ向って出

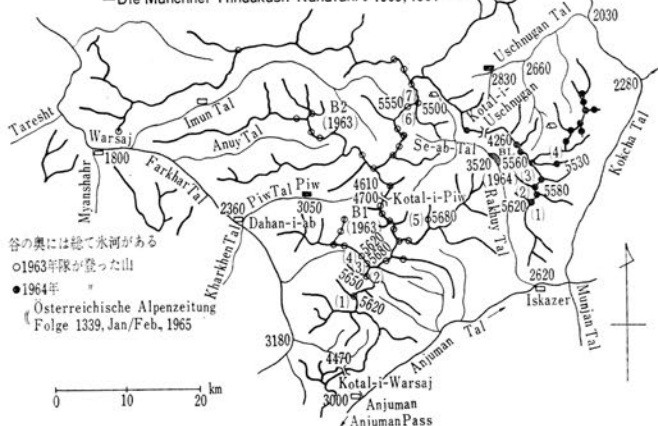
発し、四、五〇〇mの高度にテントを張った。

この時は午後にも可なり遅かったが担夫達は充分な賃金を貰ったにも拘わらず、いつまでもテントの傍にとどまっていた。

登山家がテントの中で夕食の準備をしていた時、ボールに石が飛んできて当たった。シュトラースが何だろうと思って外へ出た途端に、ドーンという銃の音がした。

MITTLERES KHWAJA MUHAMMAD-GEBIRGE

— Die Münchner Hindu-kusch-Kundfahrt 1963, 1964 —



谷の奥には絶えず氷河がある
○1963年隊が登った山
●1964年
Österreichische Alpenzeitung
Folge 1339, Jan./Feb. 1965

0 10 20 km

彼は弾に当たって前に崩折れてしまった。他の二人は直ぐテントから這い出して防衛物を探した。

もう夜になっていたが、月の光で、時折アフガン人の一人がウロしているのが見えた。

アフガン達は登山家にドンドン石を投げてきた。暗闇の中の怪しい闘い、ハーゼとリンクルは度

を失ったが、前者は戦斗の合間に、重傷をうけたシュトラース

をテントの中へ引摺り込んだ。騒音のしていた時にハーゼが外に出た時彼も又、貫通銃創をうけ、意識を失ってしまった。意識が戻った。意

にイスカゼールに残り、隊長は四人のアフガンを連れてBCに引返えし、それからセ・アブ谷の現場へ急行した。

その間にBCではカメラ二台と双眼鏡が一つ、上部テントではカメラ一台がなくなっていた。殺人者はBCをも荒して逐電したらしい。

シュトラースも遂に息をひきとり、テントから三〇〇mばかり離れたところにリンクルも死体となって発見された。彼は投石で殺されたらしい。

然し幸いにも隊長の従者が、殺人者の残していったパン袋の一つから、どこの村の人間であるかがわかった。そしてその翌日、犯人の二人はある牧地で捕えられ、縛られ、当局に引渡された。

八月十八日、隊長は友二人を、事件が起ったその場に埋葬した。最近の報告によると、殺人者の一人 Nasrullah (Badakhschan) はこの六月一日に中央拘留所で絞首刑に処され、他の一人 Dawran は終身刑に処された、ということである。

(吉沢)

正誤表 (240号)

4頁一段 (十七名を十八名に)・同二段 (六行目に竹田寛次氏を追加)・5頁五段 (Aucee は 1964)・8頁二段 (ソナム・バンディアル) はソナム・ウォンギル)・同二段 (アール・ワリアの・をとる)

会員通信 I

◇十勝岳裏道り◇

森谷 虎彦

最近の北海道ブームで夏ともなればなかなか静かな山行も出来かねる状態となり、特に大雪山、十勝、知床等は今や北海道夏山の銀座通りとなっていました。

そこでブーム時代でもめったに人に会わずに歩ける山を一つ。それは富良野岳六裏から登り、十勝岳の表通りへ降るコースで、これには温泉無料入浴のおまけが付く、但しこのおまけは婦人向きとは申し兼ねる。

根室本線で札幌より準急2時間40分で富良野に着く、ここでバスに替えて30分で富良野営林署布礼別事業所に着く。吾々一行三人が行ったのは八月の末の土曜日でシーズン最盛期を過ぎていた故か他に登山者は見当らない。入林許可証をもらって、ついでにコースをきいて5万分地形図をたよりに布部川を遡る。川を高捲きする立派な歩道が出来ている。富良野岳の1,000mの熔岩台地から富良野盆地に流下するこの沢は急流と滝の連続で沢歩きはさぞ面白からうと思いつく日程を考えて先を急ぐ。最後の滝を越すと眼前が急に開けて高原に出る。名付けて原始ヶ原と言う。湿原で所々にエ

ゾ赤松の群落がある。登山施設は一切無い文字通り原始の境である。事業所を二時半に出て高原に着いたのは四時半、小流のほとりの乾いた所を見付けて早速テントを張る。静かな全く静かな夜であった。この広い高原に人間と言えは吾々二名だけらしい。

翌日、早朝この高原の奥トウヤウスベ山の麓にある五反沼に往復する。静かな沼面に山が影を落として美しい。

引返しテントをたたんで布部川の左俣沿いに登る。湿原の中に歩道が細々と続いている。湿原が終ると一面低い草と這松に覆われた富良野岳の南斜面の登りとなる。この斜面を歩道は富良野岳の東に続く稜線の鞍部に向って続いている。昨日テントを張った高原入口の二俣から約三時間で鞍部に達し、やつと人間の顔を見る機会に恵まれた。十勝白金温泉或いは十勝岳温泉から富良野岳に登る人は多い。富良野岳の頂上は人で混雑していて写真もゆっくり撮れない程。此処から眺める十勝岳、大雪連峰は又格別の味わいがある。眼下に開ける富良野盆地の良く整理された畑も美しい。降りた富良野岳——上木口山の稜線を斜めに横切った所が旧噴火口から出る沢でこれはぬるい湯が流れている。此処で噴火口に向って沢をつめて行く。時々手を沢水につけて湯加減

を調べ乍ら適当な温度の所でストップする。湯口に近より過ぎると熱いので適当な所で川底を手でかいて周囲に砂礫を積んで川をセキ止め即製湯舟を造って入る。一人一浴槽で、体を伸ばして入る所等洋式の風呂と同じ要領である。もう此処は十勝の表通りなので時たま火口見物の登山者が通るが吾々の入浴姿に先方が遠慮してよけて通ってくれるのがある。40分程湯に浸って降る。この旧噴火口を源流とするヌッカシ富良野川沿いの通を降ると標高1,000m地形図で滝記号のある少し上の高台に十勝岳温泉と云うのが最近完成した。これより白金温泉に降るコースもあるが旧噴火口からの沢沿いに立派な自動車道が出来てバスも通っているのて今回はこのバスを利用する事とする。バスは上富良野駅に行く。十勝岳温泉は冬期富良野岳、三段山等へ登るには良い根拠地になりそうであるが、その後冬一度泊って見たがあまり安くない。今回のコースはテント携行の必要はあるが、それさえ覚悟するなら入湯税の掛らないお湯に入れる附録が付く。原始の境北海道でもただの温泉は段々少なくなった。先に一度道南奥尻島のただの温泉を紹介したが、知床半島に点々とあつたただの温泉も今では有料化しつつあるし北海道も段々住みにくくなつて来た様である。(完)

御挨拶

去る三月日高山脈の山で雪崩のために遭難された沢田さん達の遺体は、六月各方面の献身的な努力で遂に発見されました。これにつきこの度北大山岳部々長渡辺千尚氏から丁寧な御挨拶状が参りましたので、会員の皆様に謹んで御披露いたします。

謹啓

去る三月、日高山脈カムイエクウチカウシ山、幌尻岳の登山に向いました。当部部員沢田義一、中川昭三、橋本甲午、田中康子、坂井文寛、松井作頼の遭難に際しましては、関係各方面はもとより社会の皆様にも御迷惑と御心配をおかけ申し、まことに遺憾にたえぬ次第であります。茲に深くお詫び申し上げます。

一行が出発いたしましたしてから四日目に、ようやく遺骨を札幌に迎え六月二十二日山岳部葬により合同葬を行ない、それぞれの御家族のもとにおかえしいたしました。

三カ月余にわたり消息不明のまま、御遺族におかけした御心労は拝察するに余りがあり、まことに申し訳もなく致しなさを痛感いたす次第であります。この間に各方面から寄せられました御同情、関係各官公庁、陸上自衛隊、大学、山岳関係者、報道関係などからの御理解、御支援はまことに絶大なもので、私どもは衷心より感謝するとともに、今更のように責任をいたく感じている次第であります。葬儀にあたりまして多数の御会葬を得ました。厚く御礼申し上げます。いろいろ不行きとどきもあつたかと思いますが、何卒御許し願いたく存じます。

省みますと、一行は三月十日に入山、二十四日には下山の予定でした。二十五日にも下山の報告がなされたため、当時活動中の現地十勝地方山岳遭難対策協議会、帯広畜産大学等に照会し、さらに北大山スキー部からの情報により、一行は三月十三日札内川十の沢出合付近におり、その後国境尾根に登った形跡のないこと、三月十八日には十の沢付近の札内川本流に大雪崩の跡のあったことが明らかにされました。三月二十六日より三十一日にかけて、総員四十名による第一次捜査が、一行の予定コースを含め、札内川十の沢出合で行われました。北海道庁、警察本部、現地の十勝支庁、警察署、営林署、自衛隊では救難体制を即時整えて下さり、凡ゆる機能を動員して捜索の支援に当られました。現場にも危険を冒し自衛隊、道警本部のヘリコプターが飛来して偵察、連絡に当られました。このような御援助にも拘わらず何らの手懸りも得られなかった点は遺憾の極みであります。現場は四月

宝資不埋

逸存精舎

田中栄蔵

遠征というものを、

はたからみているとすさまじいものである。特に出かけるまでがひどい。別に動機とか理由というものはなくその行為と動きのことをさしているが、モノにとりつかれた様相といってもよいだろう。もっともその位でないとかけられまい。そのなかでも、当初の問題である「山を見つめる」「山を調べる」ことは、すべり出したから処女の如しなのである。もっとも現代女性的な意味において……。

※

ヒマラヤの七千米峰が貴重な存在といわれたのは、一九五七年頃である。八千米峰十四座の半数近くが登頂されれば、当然次の目標として浮び上ってくる。誰でも目をつけ調べ出す。まして有名なヒマラヤ通ともなれば、御神託をうかがわれる。海の彼方のヒマラヤの権威ともなれば、世界的にきかれるらしい。ここに引用するディレンフルト教授の文も、少し古い、よい資料である。

1. G.O. Dyhrenfurth: Winkler für Himalaya-Aspiranten. ÖAZ. 1963 März-April. S. 51-60.

2. -do-: Some Hints for Himalayan Aspirants. A.J. No. 306, 1963. May. pp. 36-47.

3. -do-: Neuland für Himalaya-Bergsteiger. Bergsteiger, 1963 Sept. S. 861-870.

だが、この文の中の未踏峰も、現在までに三割近く登頂されてしまっている。デ教授は毎年スイス山岳会年報に、前年の成果の解説をしていられるから、トレースされるとうい。

日本の遠征の業績の蓄積というものは、デ教授と同じ位にまで高いと思われるが、これが発表討論されても、一部の人々の間にだけしか知られていない。発表機関がないこと、費用がないことも妨げではあるが、よりよい次の段階を築くためには、初歩的な発表を通じて、より高次のものに進む努力がかけられている気がしきりである。

※

ここで遠征の写真について一言させてもらおう。一つの遠征隊がもち帰る写真の数は千枚以下ということはあるまい。その全部が見られるのは、関係者のみに限定されてしまう。また発表されるものは、限定されてしまい、関係のないものはネガも埋れてしまうか、秘蔵されて、門外に出ることがない。遠征隊が解散されてしまえば誰がどのネガをもっているのか

からない。それを見たい、写真をもらいたいと思っても、おいそれとはゆきにくい。せめて密着だけがアルバムとなって保存されているところがあればと思う。もっとも利用としては、地域別、山名別などの索引がないと大変な労力を払わなければならないであろう。それでも必要な人々はやらなければならないことがある。それほど根気をもつ人がいないわけではない。私などは『山岳』のパノラマ写真をあくことなく眺めているが、眼を転ずると、ブロード・ピークに登ったクルト・ディームベルガーの頂上パノラマ写真から、一つ一つの峯にアイデンティフィケーションをしている(ÖAZ 1961)。

この根底をなすものは、フィルム・ライブラリーなのであろう。遠征の行動的集約が登頂であっても、これを周知せしめるには、講演や写真・映画または文となって表現される。そしてその次の発展のために、研究や調査が行われ学術的なまとめが行われてゆく。そこまで行われていかななくては、わが国のこれまでの成果は埋れっぱなしになるのではあるまいか。

もうヒマラヤも十三年目である。ここでしめくくりをつけ、メルクマールを樹立してもよいのではあるまいか。

× × × × ×

に入っても降雪がつづき、雪崩の堆雪は堅く厚く、迫っている融雪期への配慮より、搜索は四月四日打ち切られたのであります。この搜索の際に雪崩の調査をいたしました。雪崩はその先駆に恐るべき風をまきおこし、それが谷の斜面の樹林をなぎ倒しており、堆雪中には樹幹や土石が無数にみられました。

堆雪の量と拡がりからみて、直接発掘による搜索は極めて困難と考えられましたので、融雪による自然減を待つ以外にはなく、第二次搜索は五月六日の偵察、つづいて十三日より二十名による作業で再開されました。

この間によせられた自衛隊航空隊による偵察資料、中札内の方々からの情報は貴重なものでありました。現場はなお雪深くありましたが、融雪による遺体流失のおそれもあり、地元の方の御指導でアバ(棚)がつくられ、並行してアイスオーガーによるボーリングや北大低温科学研究所の方々による雪崩の本調査も行なわれました。

雪崩は国境尾根直下に発生した乾雪表層雪崩で、標高差約八百メートルを約三キロの距離にわたって落下し、屈曲部の存在するにも拘わらず、ゆるい本流沿いに一キロもおし出していきます。堆雪の巾三十ないし百メートル、厚さ平均十メートル、容積にして六十二万立方メートルの恐るべきものであり

ます。雪崩の先駆部のけむり状の雪崩は、想像に絶する速度をもち、直径七十センチメートルの巨木をも無数に折り倒していて恐らく数百年に一度あるかないかという規模のものであります。

第二次搜索後ひきつづきパトリールを行なって来たところ、六月十三日堆雪中に生じていた穴のなかに沢田義一を発見し、同君の所持した遺書により残る五名の位置、雪崩発生の日時、状況などが明らかになりました。一行は十三日十の沢対岸の段丘斜面に雪洞を掘り泊っていました。十四日午前二時頃襲った雪崩に深く埋没したのであります。雪洞は下流に鍵の手に屈曲し、進路部がみじかかったので雪崩の先駆は奥に向って吹きぬけ天上部をつきぬけたか、あるいは雪崩風の通過直後の陰圧で天上部が落下四散すると同時に、雪崩の主流に埋められたと推定されます。沢田君は雪崩風、主流のともにかげの位置に就いていたので、僅かの空間が残されたもののようであります。同君はせまい空所のなかで身装い、寝袋、テント、非常食をもち、救援隊到着を二十九日とみて、堅い堆雪を一・五メートル掘りあげて脱出をこころみました。十七日ついに仲間の後を追っていったようですが、リーダーの責任を苦慮しながら最後まで生きる望みをすてず努力しつづけておりました。(十二頁へ)



Lho-tse Shar

吉川 尚 郎

ナムチェ・バザールの小高い丘からはじめてローツェ・シャルを眺めた。西からエベレスト、ローツェ。ローツェ・シャルはその東端にあった。ここから五日間のキャラバンで、標高五、三〇〇mのベースキャンプにつく。山は近づくにつれ、我々の楽観的な予想をくつがえした。

三月十六日から十日間にわたりルートの偵察をする。この結果、我々が当初考えていた東南稜、ローツェ・シャル氷河は、雪崩の危険が非常に多い。ヒマラヤに来てまで雪崩の事故とは、と考え、BCではじめて発見した西南稜に決めた。

この尾根は、標高七、二〇〇mで東南稜と合わる。平均傾度四二度、岩と氷雪の尾根である。ただ、大雪崩はない。

三月二十六日、C1を西南稜上、

標高五、八〇〇mの地点に設ける。四月三日、C2を標高六、三〇〇mに建設。

四月八日、六、七〇〇mに、C3を雪壁を削ってつくる。

四月一七日、標高七、〇〇〇mにC4を設営。吉川、成川の二名が入る。ここまでは急な斜面との闘いで、キャンプ間は固定ロープでつながった。隊員の調子も良好、歩なみは遅いが順調に進む。

四月十八日。西南稜はここで終り、東南稜までは高度差二〇〇mの岩壁になる。トップの成川が岩壁の基部にピトンを打ちこむ時に、左足を乗せた雪面が割れ、彼はバランスを崩して転落した。およそ一四〇m落ちて、ロープにぶら下っていた。

翌日、吹雪の中を全員がC4に集合。救出作業が始まった。この日から彼をC2までおろすのに、実に二週間を費やした。彼は全身打撲と、手足が凍傷にかかっていた。

C2に下った日、遭難現場から成川に附添っていた村井が過労で倒れた。このまま登山を中止するか、続けるか、迷うがドクターの意見をきいて再び、登攀を考える。しかし五月十五日で成否にかかわらず打切ることを全員で確認する。ともかく、東南稜上に出なければ頂に続くルートの見通しがたない。登頂出来なくも可能性だけは是非見極めたい。

五月一日、再び頂に向かって行動をはじめ。しかし、連日強風と雪に悩まされ、五月十四日、ようやくC5を建設する。山本ら四名のサポートで、松浦、井口、ナワン・ピンデユの三名が攻撃隊として入る。

翌十五日、午前二時出発。BCに入ってから三度目の満月。攻撃隊は七、五〇〇m附近から酸素素を使用し、一時間で一〇〇mの高度を登るという、快調なペースで進む。ルートは今迄と変わり傾斜もゆるく、コンティニューアスで垣々と登る。しかし頂上を目前にして、大きなギャップが現われアタック

奥高野への いざない

仲西 政一郎

(関西支部)

むかし平維盛が身の浮沈を護摩をたいて占ったという、和歌山県最高峰の護摩ノ壇山も時の流れでドライブウエーが最近山頂まで開通。高野山からマイクロボス二五人乗りが一日二往復しています(七月一日から十月二十日まで)。この地域は国定公園候補地として地元県から申請、三年前自然公園審議会委員六氏が調査に来られ(うち一人は日高信六郎前会長)私が解説役を仰せつかって同行しました。たかだか一三七〇mといった山ですが、やはり紀伊半島では大峰・台高などの背稜山脈とな

は失敗に終わった高度計は八、一五〇mを指していた。このギャップは登攀不可能と思われる。しかしC6を七、八〇〇m、八、〇〇〇mにつくり、大きく国境稜線まで迂回すれば登頂は可能だ。

登頂出来なかった原因はいくつかある。第一に成川の事故、このため二週間の彼の救出作業に費やし全隊員が非常に疲労し、病人を出した。第二に、ローツェ・シャルの天候の悪さ、我々は七日の間登山活動をしたが、この間終日好天の日はずか二日間だけであった、特に強風には全く困った。

第三に、やはり我々の見通しの甘さが考えられる。ロープに例をとれば、エベレスト、マナスル、などを参考にルートの悪さを考えエベレストの二倍。三、〇〇〇mを用意して行ったが不足だった。ヒマラヤには山の難易がない。しかし、固定ロープの長短がある程度目安になると考えられる。これは隊の登攀技術の上手、下手ではなく、シェルパが荷を背負って歩けるかどうか、固定ロープの必要性を定めるからである。この例でゆくとローツェ・シャルはかなりむずかしい山と言える。(写真はあとで届けられたので次号に紹介します)

お客をつかまえる!!

会報第二四〇号で「お客を逃がす」という記事が出ていましたが、スペイン山岳連盟会長の知人夫妻は、あの頃はオリンピックのあった時なので、体協を訪ねたのではないかという説があります。

いづれにしろ山岳会のルームに、外国語を話せる人が常時いないという現状では、今後何時こうしたトラブルが起らないとも限りません。そこで六月十八日開催の海外連絡委員会の席上、この問題を検討いたしました結果、ルームを訪ねて来られる外国人のために英文で「恐縮ながら下記の誰かに電話連絡をとって下さい」という伝言メモを、セルロイド板に入れて置くことにしましたので、報告

傍々お知らせ致します。

会 員 通 信

蔵王の山開き

III

村井米子

六月二十七日白石市の朝は、梅雨雲が蔵王連山を覆っていた。山開きに招かれた東京からの一行、三田幸夫、深田久弥、石原憲治、諸岡一、小島六郎、佐藤テル諸氏は私は、渡辺観光課長御案内のバスの窓から、大変賑に目を眩る。四十年前スキーで親しんだ三田さん、小島さん、私たちの、怖わ怖わ通った馬の背までエコーラインの大道路が貫通している。賽の磧のコマクサを賞でた後、刈田山上まで乗り上ったのは昨年歩いて登った私にも驚きであった。観光を名とした自然破壊は、いつも自然保護に先駆ける。

横なぐりの霧雨で一米先も見えぬ尾根に、吹雪の蔵王を語り合いつつ地蔵山頂まで歩く。午前十時白雲濤々の山宮で祝詞が上げられ、天狗隊山伏隊に囲まれつつ山麓四市三町の長が握手の山開きは印象的だった。行政区域を超えて一つの山の麓人が、親しく交流する精神は好ましい。式後刈田岳へもどり刈田峠口へ降りると、雲切れがしてきた。南蔵王金山縦走には無理の天候だが、風も収まってきた十二時半、杉ヶ峯辺までと下車する。仙台市からの伊達さん、観光課長さん等も加わりお馴染の榛の木婦人会の二十人余で賑やか

に、先ず降り口で滑りながらうす紅のアケボノツツジに歓声が挙がった。

天も同情したか次第に晴れ、北と対照的にびっしり茂った木や草を分け雪溪を踏む尾根歩きをらくにした。オオシラビソの下にはマヒヅルソウ、ツバメオモト、石楠花の花はまだだったが灌木帯にはイワカガミの紅、ゴゼンタチバナ、チングルマ、ミツバオーレンの白、ミヤマハンショウヅルの紫花が多い。ツマトリソウを妻恋草と談笑のたのしい山旅、遠望の大観は得られなかったが山裾の緑清らか、紙屑のない山径は快い。

杉ヶ峯を越えた芝草平の残雪と湿原には、ヒナザクラの可憐な花も「ほういいな」山形の後藤幹次さんもスケッチ帖を出す。すっかり喜んで、やっとバスへ戻ったのは四時。宿所の観光温泉一条旅館へは六時過ぎた。会食后伊達さんの映画「南蔵王の秋」「こけしのふるさと」「遭難救助活動」を拝見。翌朝は弥次郎こけしの新山氏と、和紙を手漉きの遠藤氏と見学のよい勉強。仙台市、白石市の御好意に一同深く感謝申上げる。

安達太良山の石楠花

村井米子

七月四日は安達太良山の石楠花を訪ねた。日本自然保護協会の自然観察登山の催しで、頂上には黄花岗石楠花、勢至平にはハクサン

シヤクナゲの八重、その下にはアザマシヤクナゲと摘うこの山を選んだ。

三日昼過ぎ上野発の急行で本宮下車、迎えるバスで安達原黒塚と会津戦争少年隊で聞えた二本松の霞ヶ城址を見学、岳温泉の国民宿舎寿泉荘に入る。本田正次博士からこの山の植生の解説后会食、約四十人の参加者が活発に質問や自然保護の討議をして有効だった。

四日早晩ほととぎすや鶯に覚め、晴天をよるこぶ。七時に本隊を送り出した私は、異色の参加者福島慶子さん等足弱組をまとめて八時にジープで発ち、鳥川手前の温泉ヒュッテへ二十分着く。徒歩組より先きで申訳ないが、もう直ぐ岳からバスも入る予定地だ。ここから勢至平へのスキーコースも、夏に備えて整備中、動きはじめれば標高千二百くらいまで上ってしまう。

鳥川を渡って登る道も広くなった。ヨウラクツツジの紅、サラサドウダンのうす紫、紅サラサドウダンが美しい。タニウツギの紅、ナナカマドの白、稜線を仰ぐ雄大な勢至平にはシモツケやイソツツジの白、コケモモの紅やマヒヅルソウなど。くろがね小舎までで引返した。

頂上組は大観を満喫したが黄花岗はまだで、勢至平のハクサンシヤクナゲは十株ほど開き初め、湯川口へ下山の組はアザマシヤクナゲ

の終を見た。今年は花期が遅れている。箕輪山南西の僧悟台が石楠花中心地だが、時間が足りなく割愛した。

パミールの雪

福田 宏 年

この五月から六月にかけて、約一カ月ほど、ソ連領中央アジア視察団の一行に加わって、砂漠のオアシスの町を廻ってきた。丁度、私の勤め先の立教大学山岳部で、ソ連の山への遠征の話が出かかっていて時なので、日本山岳会から推薦状をもらって、出来れば直接交渉をしてみようつもりで出かけた。モスクワに着いて早速「スポーツ団体連合代表会議国際スポーツ連絡部」を訪ねた。スポーツの国際交流はすべてここで取りしきっているとのことだった。副部長のウシヤコフ氏が親切に迎えてくれた。スポーツの国際交流を仕事にしている彼は、日本にも既に二回来たことがあり、去年のオリンピックにも来たという。早速計画書と推薦書を出して受理してもらった。

いろいろ聞いてみたが、目下のところ自由圏の遠征隊を拒む理由は何もないとのこと、会議にかけはかり、六月中に返事をするとのことだった。出来れば日本の合同パーティーにして技術交換をし、ゆくゆくはソ連からも日本へパーティーを送りたい、と向うから申し出があった。それは私たちも考えていたことなので一言もなかった。実はコーカサスよりパミールか天山に登りたいのだがという、それはコーカサスに手をつけてからにしよう、お互いに気心も知らないからとのこと、これももともとな話だった。目下のところは、返事待ちの状態だが、万事スローモーションのソ連だから二、三度催促をしなければ返事はもらえないと思っている。翌日の夜、ウシヤコフ氏と渉外担当員の二人で、ホテルのレストランに招待されて、おいしいロシア料理をこちそうになった。

その後、中央アジアに入り、パミール高原の国、タジク共和国の首都ドシャンベにも行った。同行の者が、私がヒマラヤに行ったことがあると紹介したのだから、どうしても紹介したものだから、どうしてもパミールの雪を見てもらわねばということになった。ドシャンベから北に六〇キロ、ワルゾーブ峠に近い二千米メートルの地点まで車を走らせてくれた。溪流は梓川に似て化粧柳の若葉が美しかった。コミニズム峯やスターリン峯は見るべくもなかったが、五千から六千近い雪峰を見て私は満足した。「とてもすばらしい」というと、案内人は嬉しそうになずいた。案内人は、近く四、五千米メートルのところに山小屋を造るから、是非登りにきてくれ、といっていた。

(完)

会 員 通 信

サルカンタイ
登頂報告

江上 康

朝日新聞社への電報
で新聞掲載後にこの報
告がつくと思いますが、一応報告
させて頂きます。

お陰様で六月二十一日午前十時
三十一分、岩間、里藤、宮本、川
田の四隊員、六月二十二日午前八
時半、小川、沢、堀江の三隊員に
より、それぞれ北東稜からのサル
カンタイ新登頂に成功しました。

詳細については帰国後に報告さ
せて頂きますが、ともかく非常に
困難なルートで、約一、二〇〇m
の固定綱が必要なほどでした。特
に五、三〇〇mのC2と五、六〇
〇mのC3の間は、全部固定綱で
す。現在、荷物を担いで降りられ
ないこの間の慎重な撤収を行なっ
ております。

今月末には隊員全部がBCへ降
りて、ゆっくり休養出来ると思ひ
ます。最後までベストをつくす覚
悟しております。

来月初旬から Nevados Chul-
luncy (約五、三〇〇m、未踏峰、
地図には Chuyunco, P・ギリオ
ネは Chuyunco と呼んでいます) の
二峰に登る予定であります。

七月中旬にはクスコへ降りま
す、そして八月初旬から第二次計
画に入る予定です(注・アマゾン
支流の下降)。

以上簡単なが登頂報告まで。

六月二十二日、サルカン
タイのBCにて。

ローガン隊便り

川 上 隆

出発まで大変御迷惑をおかけい
たしました。私達も十九日無事チ
ティナ入り、二十日より空輪開始
です。二十日まではロー
ガン氷河上にBC建設完了の予定
です。広大な山、湖、森林帯をぬ
つてのチティナ入りは素晴らしい
景色です。しかし今自分はアラス
カのチティナだという実感も余り
感じません。十人もいるからでし
ょう。全員元気です。山岳会の皆
様によりしくお伝え下さい。(六
月十九日付チティナにて松田宛)

マッキンレーより

先日新聞誌上で御承知の事と
存じますが、皆様のおかげで、マ
ッキンレー隊も初登ルートより登
頂出来ました。ここに厚く御礼申
し上げます。

塚崎隊長よりの第一報が着きま
したので全文を写し、とりあえず
登頂の模様をお知らせ致します。

七月三日午前九時二〇分堀浦、
西前、中村の三人が東尾根C4よ
りラッシュして三時時間の苦闘後
マッキンレー頂上に初登攀しまし
た。

鍋木は頂上直下大へん苦しみ、

数回嘔吐して意識の変調を来とし
残念にも約六、一〇〇mの地点で
動けず涙をのみました。しかし三
隊員の助けをかり無事にテントに
帰ってからは容態も充分回復し、
元気になりました故ご安心下さ
い。

小生も七月二日は五、七〇〇m
の地点でビバークし、アタック隊
のサポートをしたが、全く強風と
寒さには驚異の他ありませんで
した。

こちらは天候は余り良くなく、
五日に一日晴天と云ったところ
で、毎日きまつたように夜明けか
ら午前中晴れ、午後はガス降雪、
吹雪と云つたように規則的に変化
する故、我々の行動もこれに合
せ、午後休息、早朝または深夜よ
り活動開始です。最も夜が短く、

屋間はそれ程休みません故、自然
と睡眠不足となりましたが、隊員
は私はじめ大した症状も来すこと
なく六月十九日氷河上二、二〇〇
mに着陸後は殆んど停滞すること
なく毎日動き六月二十四日BC完
成、六月二十八日C1完成、六月
三十日C2完成、七月二日四、八
〇〇mの比較的低いC3にテント
を移し午前十時出発、翌朝登頂し
て、七月三日午後八時にC3に帰
って来たわけですね。

これは天候とコースの悪さの故
に高所キャンプの設営が不能であ
り、連日の降雪に下からの物資輸
送が意外に日数を要するために止

(九頁より)

残る五名は就寝したままの姿で
六月十六日発見の報知で駆けつけ
た隊員四十五名の手で収容され現
地でダビに付されました。収容に
当っては帯広警察署、営林署の係
官も地元山岳会員をとめない来ら
れ指示を与えて下さいました。ま
た御遺族の方々の一部も収容にお
見えになりました。

以上遭難発生より収容までの経
過を申し上げましたが、この間率
直な御忠言も頂戴しまして、われ
われ心から感謝し、今後の自戒の
資に致したいと存じます。

雪崩が起つた後で考えてみます
と、起るべくして生じていたこと
は明らかで、私どものいたらなさ
はお詫びの申し上げようもないの
であります。今回彼らが異つたル
ートを歩いていたら、あるいはこ
の雪崩は避け得ていたことであ
りましょう。しかし私どもは異つた
ルート例えば尾根を歩きさえすれ
ば、常に安全であるとは考えてい
むを得ず、小生の下したラッシュ
戦法をとらざるを得なくなった結
果ですが、皆よく頑張ってくれて
私として何も云うことはありませ
ん。

隊員帰国後は、わが会としてよ
くほめてやって頂きたいと思っ
ております。では又皆様によろし
く。

尚コースは色々意見もあったの
ですが、私としてはイタリアンル

ません。われわれは完璧な判断力
を具えていないことを知るだけ
に、自然の千変万化する難かしい
条件に対し、北大山岳部四十年の
経験、研究をもつても何時に
なっても未熟者で、不完全な登山
者でしかないことを改めて痛切に
感じました。

だからこそ完璧は期し難くとも
今後一層の努力、研究を尽し、そ
れなりの責任は常にもちたいと考
えております。

これからも皆々様の御鞭撻、御
指導を心からお願ひする次第であ
ります。 敬 具

昭和四十年六月二十三日
北海道大学体育会山岳部
部長 渡 辺 千 尚

月見キーパーティー

九月十一日(土) ルーム屋上中
秋の満月の日です。で会員皆さ
んの参加を御待ち致しております。
す。会費 参百円
(東京支部)

イトは取り止め、比較的長大な、
クレバス、アイスフォール、急雪
面と岩稜のつづくサウスバットレ
ス経由の東尾根を選びました。
西前君のよく調べた文献及びウオ
ッシュバーンの手紙にても、これ
は初トレースです。

昭和四十年七月十三日
全日本山岳連盟
アラスカ登山隊
事務局 浅 野 清 彦



中村清太郎画

第一回 海外登山懇談会の報告

◇七月五日(月) 於ルーム

◇出席者

ゲスト・(明大登山隊) 藤田佳宏、平野真市(早大登山隊) 浜野吉生

一般・松沢憲夫(日ネ協会) 野田耕一郎(電気大) 遠藤禎一(北大OB) 他早大AC二名、吉沢一郎、深田久弥、松田雄一、大塚博美

第一回はネパールヒマラヤを中心として話題を絞り、そのため本年度ネパールに登山に向った明大、早大の両登山隊の隊員をゲストに招き、最新のことを聞き懇談した。主な事項としては、ネ政府の登山禁止令の真相については、質問であったが、これについては、何等新しいニュースはなかった。又カルカッタの通関、ネパールへの入国、とその税金などの手続きや、実情について話題が移り(例えば煙草などは100%の税金がとられるので、現地で購入した方がい

いなど) 実際の登山については今年は非常に天候が異常であったという報告もあるのでソロクンブには、早・明二隊の他インドがエベレストに入っており、又中央地区のダウラギリには愛知岳連が行っている、各隊の報告をまとめて、気象状況など、過去の記録と比較研究してみたらどうか、そうすれば、今年が案外平年並みかも知れない。インド隊は前回に比べれば今年はいい方だった、とも言っている。

サード、シエルバ、リエゾンについて、日本隊としての扱い方などが話題になり、過去の日本隊においては当り外れが多い、という意見が強く、このためJACで、サード・シエルバ、リエゾンなどの信頼に足るリストを作ったり、ネパールが登山禁止している期間中落着いて研究調査をしたかどうか、などであった。気楽で楽しいふん開きの会であった。本気に海外登山を考えている人達には大いに参考になったらうし、海外登山の希望を持っている会員諸兄にはPRが不足で集りが少なく申し訳なく思っていますが、これは毎月第一月曜の定例月例懇談会ですからは是非ともご参集下さい。

九月 欧州アルプス他
十月 南米アンデスその他
十一月 北米その他 (大塚)

図書紹介

著 二・雄 今井喜美子
今井喜美子

心に山ありて

この本は今井さん夫妻が「幼なかつたころから今日のまでの山行を回想する形で」まとめたもの。五十年にわたる山行について、夫が折にふれて書いた文章に、新たに巻頭の「心に山ありて」と巻末の「還暦登山」が加えられている。

その巻頭の一文で今井さんは、飛驒の山村に生まれてからの、山とのつきあい、夫人との出会い、結婚後の山とスキー、さらに戦時に薬科へ疎開しての炭焼生活などにふれたのち、戦後ようやく山行の自由を回復して、単独で孤獨な山歩きを楽しむ間に「山は完全に自分の心のなかにあった。そしてその山とはつまり自然そのものにほかならないことを悟ったのだ」と述懐している。これが本の題名ともなり、この本を貫く基調となっている。

今井さんはこの一文をはじめとして十二篇、夫人の方は十篇、いずれも心楽しく読めるが、とくに私には「曇岩」「北尾根」「ルソーとともに」夫人の「彼・スキー・煙草」「吹雪く梓川」などが好篇と思われた。「孤獨な雲」のなかに記されて

いる人海登山のような混雑のないよき時代に、夫妻そろって岩と雪を堪能していることは羨やむ向きは多いことだろう。私なども、時代を同じくしているだけに、夫妻のしつとりした山行に共感しがちなのかも知れないが、若い人たちにもすすめたい気がする。

二五六頁 写真十七葉 昭和四十年五月 同信社刊 七五〇円 (島田 巽)

雪原の足あと

坂本直行著

「雪原の足あと」は坂本直行君の最近の画・文集である。画文集は前の画文集「原野から見た山」が最初だが、今度の「雪原の足あと」は同じ形のものの、ただ同じ画文集でも今度はその「画」の部分が、一層大きな比重を占めている。

茲には開巻を本業とし、日高の原野と取組んで悪戦苦闘していた著者が、その生活の記録を書いた、それに自分の挿画を入れてきたわけだが、今日著者は日高の原野を離れて画家として自分の道を拓かうとしている。そしてこの「雪原の足あと」は今日の著者のこうした姿をそのまま反映して、画集としてもまことに美事なものにでき上っている。

何はともあれ楽しい本だ。舞台が北海道の山々で、登場人物がアイヌの又吉や、既知未知の山仲間だ。そして挿画は色刷が四

十近くある。単色の挿画やカットは六十も入っている。

定価二、八〇〇円は必ずしも安いとは思わぬが、本屋の店頭で眺めてすむようなものでもなく、友達に借りて片づく本でもない。やっぱり自分の書棚において、つづく眺め、つづく読んで「直行」と共に北海道の山や花や雪を楽しむのがほんとうだろう。

今度の画文集が山下、林、望月三君の協力によってでき上っていることも附言する必要がある。文章と絵を組み合せ、かみ合せ、そして本としての抑揚をつけて行く仕事は、大変なことであつたろうと思う。

著者あつてのことであることはもちろんだが、著者一人にまかせておいてもこんな本はできなかったかも知れない。できたとしてもいつできるか見当もつかない。「雪原の足あと」は著者を取まぐ友情の産物でもある。

とにかく美しい、楽しい本であり、気持のいい本だ。
昭和四十年四月一日茗溪堂発行
B5版一九二頁 挿画多数
二、八〇〇円。(松方三郎)

九月三水会 夏山懇談会
会員同志の親睦をかねて「夕山の放談をしたい」と思っています。特に新入会員の御出席を望みます。
日時 九月十五日(水) 六時半
場所 山岳会ルーム(東京支部)

会務報告

七月、理事・評議員会議事録
(七月一日ルーム)

- ▽出席者 松方会長、渡辺副会長、理事・加藤、深田、辰沼、大塚、松田、飯野、武藤、田村、住吉、田辺、竹田、川崎、杉浦
- 評議員 日高、神谷、吉沢、村井、藤井、川喜田、監事 野口、東京支部 石原支部長、沼倉、芳野
- (委任) 三田副会長、宮下理事、藤島(敬)、青木、今西(寿)、橋本、津田、後藤、高山、野口各評議員
- ▽議事、報告事項
- (1) 経理規程(案) 検討の件(飯野)
 - (2) 会費納入規程
 - (3) 支払規程
 - (4) 旅費規程
 - (5) 各案とも原案通り可決。
 - (6) ①③は昭和四十年四月一日より実施
 - (7) ②は七月一日より実施。
 - (8) ④は昭和四十年四月一日より実施
 - (9) ⑤は七月一日より実施。
 - (10) ⑥は七月一日より実施。
 - (11) ⑦は七月一日より実施。
 - (12) ⑧は七月一日より実施。
 - (13) ⑨は七月一日より実施。
 - (14) ⑩は七月一日より実施。
 - (15) ⑪は七月一日より実施。
 - (16) ⑫は七月一日より実施。
 - (17) ⑬は七月一日より実施。
 - (18) ⑭は七月一日より実施。
 - (19) ⑮は七月一日より実施。
 - (20) ⑯は七月一日より実施。
 - (21) ⑰は七月一日より実施。
 - (22) ⑱は七月一日より実施。
 - (23) ⑲は七月一日より実施。
 - (24) ⑳は七月一日より実施。
 - (25) ㉑は七月一日より実施。
 - (26) ㉒は七月一日より実施。
 - (27) ㉓は七月一日より実施。
 - (28) ㉔は七月一日より実施。
 - (29) ㉕は七月一日より実施。
 - (30) ㉖は七月一日より実施。
 - (31) ㉗は七月一日より実施。
 - (32) ㉘は七月一日より実施。
 - (33) ㉙は七月一日より実施。
 - (34) ㉚は七月一日より実施。
 - (35) ㉛は七月一日より実施。
 - (36) ㉜は七月一日より実施。
 - (37) ㉝は七月一日より実施。
 - (38) ㉞は七月一日より実施。
 - (39) ㉟は七月一日より実施。
 - (40) ㊱は七月一日より実施。
 - (41) ㊲は七月一日より実施。
 - (42) ㊳は七月一日より実施。
 - (43) ㊴は七月一日より実施。
 - (44) ㊵は七月一日より実施。
 - (45) ㊶は七月一日より実施。
 - (46) ㊷は七月一日より実施。
 - (47) ㊸は七月一日より実施。
 - (48) ㊹は七月一日より実施。
 - (49) ㊺は七月一日より実施。
 - (50) ㊻は七月一日より実施。
 - (51) ㊼は七月一日より実施。
 - (52) ㊽は七月一日より実施。
 - (53) ㊾は七月一日より実施。
 - (54) ㊿は七月一日より実施。

では、本規定に基づき常務理事会の承認を得て推薦状を発行したが、台湾に於ける立正大、拓大隊については、種々と現地の受入れ事情もあるため、折井海外連絡委員(台湾担当)を交えた常務理事会に一任する。

(5) 支部主催による海外登山の承認規程(案)承認の件 (松田)

各支部長宛原案を送付して意見を求めたところ、異議なしとのことであるので本件承認することを可決。

(6) 各担当理事報告

① 総務 (加藤)

常務理事会を六月十日、十六日開催。六月七日信濃支部との懇談会。六月二十三日退任理事懇談会を行った。七月六日には東京支部との懇談会を行う予定である。今後各支部と逐次懇談会を行う。

② 山岳協会報告 (加藤)

常務理事会を六月中旬四回(四日、十一日、十七日、二十九日)開催した。目下協会一本化についての具体案を検討中であり、近く草案ができあがる予定である。尚後任会長問題については未だ決っていないが、武田前会長は新会長が決まるまでの期間、会長をお願いする事についての諒解を得ている。

③ エンレスト委員会報告 (加藤)

詳細会報二四一号参照された。

④ 海外連絡委員会報告 (松田)

六月十八日第一回の委員会を開催した(十四員参照)

⑤ 庶務報告 (松田)

役員・委員名簿を作成した。各種用箋、会員カード(パンチカード)を作成、オリビオを購入したので、今後はこれを活用して整理していきたい。尚オリビオ使用規定を作り、各位にも活用戴くことにしたので、各位も利用されたい。

⑥ 集金係報告 (川崎)

六月二十四日早、明ヒマラヤ隊歓迎会

を盛会裡に行った。(次号参照) 又六月二十九日には第三二回小集會、藤島敬男氏の「山岳放談」を行った。尚八月に年次晩餐会に代るべき夏の大会を行う予定である。(都合により中止)

⑦ 海外登山 (大塚)

七月五日に第一回海外登山懇談会を「ネパール・ヒマラヤ」をテーマにして開催の予定である。(十三員参照)

毎月第一月曜日にこの懇談会は定例的に行うので、会員の出席を歓迎します。

⑧ 装備係報告 (大塚)

装備品買出規定案を検討中である。装備品は近く整理の予定。

⑨ 研究調査 (田村・武藤)

ネパール国大使館開設のお知らせ

この七月十五日よりネパール国大使館が左記に開設された旨、日本ネパール文化協会より連絡がありましたのでお知らせ致します。

記

東京都千代田区紀尾井町
Hotel New Ohani, No. 539
(電) 二六五一一一

六月八日に「夏山計画とシゴキ」をテーマに集会を行った。六月十七日、二十二日、二十三日にはブロック別の集会を開催した。七月二日には懇親会、七月五日には加藤、谷口両氏を講師に迎えて講演会を行う予定。最近では本会の学生部に対する熱の入れ方を反映してか、集会は昨年に比して盛会であり楽しい会となってきた。

⑩ 会員係 (深田・杉浦)

目下名簿の作成を急いでいる。名簿はA5版九十六頁を予定し、山岳会沿革、日本山岳会定款も入れる予定である。完成は九月初旬、一冊当り二〇〇円位かかる見込みである。

⑪ 会報編集 (吉沢)

原稿が多いため嬉しい悲鳴を上げている。この所八頁の予定が十六頁に増員している。

⑫ 関西支部報告 (住吉)

明治生命ホールで行われる山岳展「雲海を行く」の講演者には深田久弥、今西錦司両氏にお願いしている。

⑬ 支部係報告 (渡辺)

静岡支部より依頼のあった本川根山岳会講習会に本部より講師派遣の要望の件については渡辺副会長(辰沼理事)が出席した。竹田理事を派遣することを決める。

(7) 其の他連絡事項 (松田)

- ① 信濃支部より異境縦走に使用するため無線器借用方申入れがあった。本件芳野委員に連絡を一任する。
- ② 韓国訪日登山隊に招請状発行の件目下折井評議員にお願として手続中である。
- ③ 七月三日に行われる北大山岳部沢田義二氏の告別式には本会代表として藤井評議員に出席をお願いすることを決める。

▽出席者 三田、近藤、吉沢、丹部、折井、袋、芳野、松田、倉知

今年度より新たに発足した海外連絡委員会の第一回会合(顔合せ)を行った。事務局である担当理事の松田より、委員会設立の趣旨、運営等について説明あり、現在交流のある海外の山岳団体についての紹介があった。次いで各委員よりソ連邦の登山事情(袋)、ヒマヤン・クラブ(三田)、外国からのジャーナル類の到着状況(倉知)等の説明があり、今夏アラスカに於ける芳野委員、シャモニー登山集会に於ける倉知委員からはその旅行予定につき説明があった。又たま〜来訪した日大グリーンランド登山隊の宮原隊長から同隊の行動予定につき説明を聞いた。

尚今後は毎月第三金曜日に本委員会を開催し情報を交換することにする。(松田)

Journals arrived in June, 1965

1. The Canadian Alpine Journal Vol. 47, 1964
2. Rivista Mensile, Vol. LXXXIV, No. 4 April, 1965
3. De Berggids(Himalaya Number) April 1965
4. Appalachia Bulletin, Vol. XXXI N.S. No. 5-6, May-June, 1965
5. Journal, No. 1, 4, 6, 11 (Published by Swiss Foundation for Alpine Research)
6. 台湾山岳 会報第14巻第3期(中華民國54年5-6月号) (松田)

ペルーの遠征隊の通関について

此の度、在ペルー国山津大使より外務省情報文化局を通じて関西の某大学遠征隊が、カイヤオでの携行荷物の通関に際しトラブルを起し、同遠征隊が同地で予定より一週間以上滞在を余儀なくされたばかりでなく、大使館も又、可成りの迷惑を蒙ったので、今後はこの種の問題が重ねて発生しない様、十分に注意されたい、との連絡がありましたのでお知らせします。

これによると、パッキング・リストに記載されていた装備品、食糧等については簡易通関を許可され何等問題はなかったが、パッキング・リストに記載されていない携行品（ペルー在住の邦人に依頼されて持参した品物）が当然のこととして税関当局の問題となった訳で、本件に関連しての山津大使の要望点は次の通り。

「本件により税関当局の心証を害したことはいうまでもなく、通関手続自体、例になく煩わしさを加えたことは勿論、将来にも何らかの禍根が残ることなきや保し難き実情である。

今年には本邦各大学より多数の探検隊が当国に派遣される予定のところ、これらのものが入国に際し

て何らかペルー官憲と悶着を惹起し、或いは搬入品について嫌疑を蒙るが如きは、厳にこれを避ける要あること、ここに申すまでもない。ついでには今後、この種の遠征隊が本邦出発前に、本省に対して簡易通関の便宜供与方依頼してきた際は、事前に当事者に対して十分なる注意を与え、この種の問題が今後重ねて発生しない様、十全の御配慮を賜わりたい」（以上）

▼編集後記▲

二四三号に掲載させて頂く分が次の通りになりました。御諒承下さい。（敬称略）

六義園の件（山下一夫）、自然保護委員会のこと（村井米子）、金山平碑前祭（山村正光）、ロツエ・シャル写真三枚、クルツのクロニク補遺（吉沢）、BC海岸山脈案内（松田）、支部情報（東京、東海、関西）、明大、早大隊歓迎会報告、岳人の奥津城・下（古沢肇）、JAC海外登山に対する推薦状発行規定。以上で約五頁になります。（吉沢一郎）

昭和四十年八月十五日発行

東京都渋谷区神宮前

三ノ三 外苑コーポ内

発行所 社団法人 日本山岳会

編集代表 吉沢一郎

頒価五十円

電話（総）六五〇一五

振替口座東京四八二九番

印刷所 株式会社 技報堂